

田村雅之さんに聞く

聞き手 吉川 宏志

記 録：澤村 斉美

文字起こし：千田 智子



砂子屋書房社主で編集者の田村雅之さん（左）と聞き手・吉川宏志

＝東京・神田の砂子屋書房にて2023年4月8日

*資料を92頁に掲載しています。

■編集者としての出発

吉川 今日は砂子屋書房社主で編集者の田村雅之さんにお話を伺います。いま私は『短歌研究』で「1970年代短歌史」という連載をしているのですが、当時の短歌界のリアルな話を残していくことが大事だと思っています。七〇年代から編集者として仕事をされ、さまざまな名歌集を出版され、歌人とも深い交流のあった田村さんのお話は、歴史的にも貴重な証言になると思っています。短歌の〈今〉を理解するには、過去を知ることが重要になります。「塔」では、そういう姿勢を大切にしたいんですね。それで、ぜひ「塔」の企画としてこのインタビューを実現したかったです。

田村 僕の出発というのはね、大学時代に独研というサークルに入ったんですね。

吉川 明治大学のドイツ文学研究会に入られていたんですね。

田村 ドイツ文学研究会に入って四年間続けるんですけども、その周辺で『駿台論潮』という学生が出していた雑誌があったんですよ。学生が書くんじゃないくて、普通の文芸雑誌と同じ内容で、学生が編集者になって当時の思想家とか批評家、吉本隆明とか、磯田光一とか、黒田喜夫とか、谷川雁とか、森崎和江とか、そういう人たちに書かせるんです。その

傾向がほとんど僕の基礎になってるのかも知れない。

吉川 そのときには学生の編集者として関わられたんですね。

田村 そこに入らず、その周りにいたんですよ。それが自然に国文社に入るきっかけにもなるんじゃないかも。

吉川 学生時代にアスバック（注・アジア太平洋協議会。冷戦下で共産主義国に対抗する狙いがあった）の反対闘争で捕まっていたのは本当ですか。

田村 目黒区の碑文谷署に入りました。全員逮捕だからしかたないね。

吉川 そのために就職が大変だったとか。

田村 ちゃんとしたところはほとんど無理だろうと諦めた。

吉川 国文社に入ったきっかけはどういうことだったんですか。

田村 それは、大手の出版社が全部駄目だったから、仕方なくそこに。大学院に行こうと思って勉強もしたんだけど、語学もできないし、それで途中で諦めて編集者になろうというふうにして国文社を受けて。結構な倍率で一人しか入れなくてね。そこは松永伍一が初代の編集長。二代目が林利幸さんという人で、僕が次の代に入って。

吉川 国文社っていつぐらいからあったんですか。調べても分からなくて。

田村 去年潰れちゃったんだけどね。何年やっていたんだろうね。もともとは古本屋さんなんですけども、傾向的にはアナキーっぽい。森崎和江、谷川雁の詩集とか、秋山清も出てたりする。皆さんはもう知らないだろうけど、陀田勘助という詩人、伊藤和とか、こういうかなりマニアックな、まあ左翼ですよ。

吉川 その当時は、会社ができ間もないころだったのですか。

田村 そんなことない、谷川さんだって『天山』という詩集を出してたぐらいだから。

吉川 会社には何人ぐらいいらっしたんですか。

田村 会社として二、三人ですよ。

吉川 池袋にあったとか。

田村 池袋にあった、びっくりガードのところにあつてね。まあ薄給の極みだね。

吉川 まあそうでしょうね。

田村 あつという間に編集長になっちゃったんですよ。

吉川 入社の翌年ぐらいだったみたいですね。

田村 たまたまね。つまりね、秋山清の詩集を出そうと思ってやっていたら社長が怒つてね、秋山清なんか出すんじゃないかって言って金貸したらいいんだけど、それが返ってこなかったってね。それで俺は、編集権の濫用だ

ろう、やめてやるって言ったんだけど、編集長の林さんから「田村君、一年ちょっとの編集経験じゃちょっとまだ力不足だから、こゝでもう少し頑張ってやりなさい」って言われてとどまったんですけど。

吉川 それで『磁場』を作られたんですか。

田村 その数年あと。その前に『無名鬼』の村上一郎さん、吉本隆明と出会ったことが大きい。まさか吉本さんと会えると思わなかったからね。

吉川 それも雑誌か本の編集の縁ですか。

田村 当時の時代の思潮でもあるけど、ずっと読んでいましたから、吉本さんの周りのものに関しては何、当然のようにして。家まで行って会うことになって、それから何もう足繁く吉本通い。もうあの頃、ほかの編集者は吉本さんにあまり会えなかったんですよ。吉本さんはほかの出版社はみんな切っちゃって、雑誌の『試行』だけ。編集者は吉本さんがもう怖くて会いに行けない。第一に、会ってくれないしね。だから、会えたのは幸運でした。

『試行』の広告とか持って行ったいろいろするんだけど、それで、吉本さんの周りの著者たち、例えば村上一郎とか谷川雁はもちろん、月村敏行とか、磯田光一とかね、そういう親しい人たちと会えるわけ。橋川文三さんとか。吉本さんと東工大の同級生だった奥

野健男とか。弟子の梶木剛とか。そういう人たちの家にも。例えばまず村上さんに会ってこいって編集長が言うので、市ヶ谷の村上さんの会社に行く。村上さんは当時、囑託で紀伊國屋出版部にいたんですよ。

吉川 ああ、そうなんですか。

田村 ええ。それであの人はね、バルカンのパスカルって言われてたE・M・シオランの『歴史とユートピア』という本を当時紀伊國屋で出したの。いい本ですよ。シオランの中で一番いい本だと思うけど。

吉川 読んだことない(笑)。

田村 読んだことないの？ 僕、シオラン著作集も出したんだけど。

吉川 ああ、そうなんですか。

田村 ええ。樋口覚はフランスまでシオランに会いに行ったんですよ、桶谷秀昭さんと一緒に。シオランはアナキーな人だからね、そういう人と。それで、そのシオランの『深淵の鍵』は出口裕弘さんに訳してもらった。当時はシュルレアリスムとか、翻訳物が多かったです。メルロー・ポンティの『意味と無意味』とか、ドゥルーズの『ニーチェと哲学』とか、そういう本も僕が編集者として翻訳してもらった。当時、僕の最初の机の上にあったのはモーリス・ブランショの『ロートレアモンとサド』、メルロー・ポンティの『意味と

無意味』、アンドレ・ブルトンの『黒いユーモア選集』。なかなかでしょ。

吉川 そうですね。当時はまだ、フランス哲学が流行する前でしょう。

田村 まだ早い。

吉川 早い方ですよ。一九七〇年代前半だったら、構造主義もまだ一般には知られていなかった頃でしょう。

田村 ジョルジュ・ブーレとか、新批評のリチャーズとか、ガストン・バシュユールとか、そういう人たちが流行ってた頃です。

吉川 ドゥルーズなんか、流行るのはもっと後でしょ。八〇年代ぐらいじゃないですか。

田村 ドゥルーズはもっと後です。翻訳は、翻訳権取ったりしているいろいろ大変。みず書房と法政大学出版局あたりの出版社が僕の競争相手で、翻訳権を取るといっているので、誰が早いか、取りっこするわけ。

吉川 なるほど、すごいですね。

田村 ですから、そういう方では一生懸命やってみましたね。

吉川 吉本さんに気に入られた理由は何かあります。今考えると、どういう感じの付き合ってたんですか。

田村 僕はあまり言わずに言わないからだらうね、静かだし。

吉川 飲みに行ったりとか。

田村 飲みになんか全く行かないですよ。

吉川 ああ、そうなんです。当時の人って飲みに行ったりするのが多いイメージなんです。

田村 いやいや。吉本さんと飲みに行くことは、ずっと後にはありますよ。新宿行ったりするけども。普段は書斎にお茶を持ってきてくれて、それがいいお茶なんです。ぶきつちよな作法で出してくださるけど。よく来た、おーっとか言ってる。

吉川 当時だと、吉本さんの本というのと『共同幻想論』とか、その前後ですか。

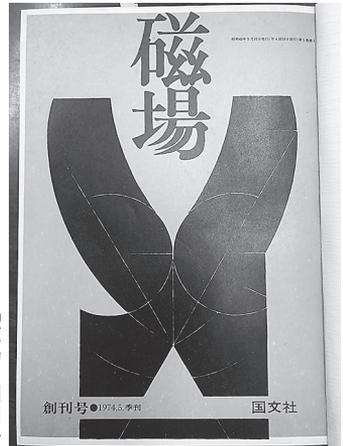
田村 僕はゆくゆくは、『心的現象論』を出すことになってたの。序説じゃなくて総論。最後まで、生前では出せなかったんだけど、あの本を僕がやることになっていて、あれを出せばそれまでの累積の赤字は埋まるだろうと。売れるはずだからね。女房もそれを当てにしてたらしいけど。

■文芸雑誌『磁場』の時代

吉川 一九七四年に『磁場』を創刊されて。(実物を手に取り) これすごい。立派ですね。びっくりしました。

田村 字が多いでしょ。

吉川 多いし、デザインもすごくきれいだし、もう本当に総合誌、今だったら『現代詩手帖』



『磁場』創刊号

とか、そういう感じでですね。

田村 これが創刊号。創刊号の中身はこういう(目次を見せる)。

吉川 いい雑誌ですね。書いている人たちにさっきの話に出てきた方たちがいます。

田村 頭から最後まで全部読めるっていうね、そういう雑誌だってよく言われましたけど。

吉川 鮎川信夫さんも書いてた。

田村 詩ね。

吉川 シオランはこれか。佐々木幹郎さんもある。

田村 そうそう。

吉川 さっきの話だと、国文社はそんなに人数が多くなかったんですね。

田村 『磁場』は僕だけの企画だから、編集者

は僕しかない。(執筆者には)塚本邦雄さんもいる。ほら、この『磁場』四号で岡井隆さんが短歌に戻るわけ。

吉川 そもそも岡井さんとはどういうきっかけで出会われたんですか。短歌が『磁場』の誌面に入ってきたのはどういう経緯なんですよ。

田村 それも千駄木の吉本さんの書斎で話に出るわけよ。三、四時間も書斎にいて。帰って言わないんだよ。

吉川 やっぱり相気に入られたんでしょうね。どういう話をしてたんですか。書いている内容とかの話ですか。

田村 噂話とか、あの人はどうだとか、そういうのから始まって、評価をめぐってとかいろいろ。吉本さんがどんどんしゃべってくるし、ああ、そうですかって、僕も意見を言うけど。

谷川雁さんなんかもいて、当時、谷川雁さんなんて普通の人は会えないわけ。「瞬間の王は死んだ」なんて書いて、もう筆折っちゃってるんだもん。でも僕は谷川雁さんとも会えるわけよ。なぜかというよね、印税の小切手を持っていくんだよ。二万とか一万とか、それはやっぱり判こ押さなくちゃいけないし、会ってくれるわけよ。またそこに、谷川俊太郎がラジカセ持って歩いてたりして、「おお、

谷川君」とかって谷川雁さんが呼びとめて、谷川俊太郎さんが「何やってるんですか」って、「いや、今、詩の講義してるんだよ」って。

「君も一緒に来たまえ」とか言ってるんだけど、谷川俊太郎さんは「いや、僕は遠慮しますよ」って。それで、僕の詩を谷川雁さんが添削するんだ。添削するとだね、いっぺんに谷川さんの詩になっちゃう。もうすごいよ。あつという間だよ。だーって赤入れて。もう完璧に谷川さんの詩になっちゃう。

吉川 そうなんですか。

田村 「君、君、『の』だよ、『の』が一番大切だよ、助詞の「の」だって言って、そういうちゃんとした「詩論」の話をしてくれる。小切手持っていくだけで、一時間しゃべってくれるんだから。なかなかでしょ。

吉川 おもしろいな。岡井隆さんは、当時はまだ会ったことはないわけですね。当時は岡井さんは失踪中だったですものね。

田村 うん。失踪していたんですよ、この頃は。噂には出るわけよ。吉本さんは「どこ行っちゃったんだ」って。

吉川 吉本さんは岡井さんと論争してますものね（注・一九五七年の「定型論争」）。

田村 そしたら居場所が分かったんだよ。吉本さんに僕が聞いたのかもしれないけど、それで、九州の遠賀郡に手紙を書くんだ。それ

が巡り巡って岡井さんは最後に豊橋に帰ってくる。そこで、歌を発表するということになるんですけど。

吉川 『磁場』四号に載っている「西行に寄せる断章。他」が、短歌をもうやめるって言っていたところからの復帰作になったんですよ。

田村 そう、復帰第一作なんだ。みんな驚いたわけよ。岡井がまた歌を作り始めたぞって。吉川 またこのときの歌が、むちゃくちゃいいんですよ。『ひぐらしはいつとしもなく絶えぬれば四五日はへ躁』やがて暗澹」とか。

田村 そして、豊橋に行って岡井さんに会おうとすると、そこに北川透さんがいるんですよ。僕は北川さんの仕事もしてるから。中原中とかの本も出してるから。北川さんの家に行く

くと、北川さんは「おお、よく来た」って、わたしは泊まることになるの。夜遅くまでしゃべるとね、岡井さんが車でやって来る。それで酒飲むんですよ。それで夜中に運転して帰る。

吉川 田村さんが会われる前から、北川さんと岡井さんは親しかったんですか。

田村 うん、親しかった、岡井さんが豊橋に行ったからね。それ以前ではそんなに親しくはないと思う。

吉川 豊橋で田村さんは岡井さんと初めて会

ったわけですね。

田村 初めて会ったのは、もっとなどこか別なところでもう会ってるかもしれない。



『磁場』。岡井隆、佐竹彌生といった歌人の名前も見える。手前が終刊号

吉川 このあたりから短歌にも関わり始めるわけですね。

田村 最初は村上一郎の個人雑誌『無名鬼』

の周りの歌人たちなわけですよ。それが山中智恵子であり、馬場あき子であり、百々登美子であり、河野愛子であり。佐竹彌生もね。みな執筆者だった。

吉川 河野愛子さんも『無名鬼』だったんですか。

田村 『無名鬼』です。三人、山中、百々、佐竹ってのはもう三姉妹っていう感じだったから。それで村上さん、あの人も交流が広い人ですからね、そのつながりで樋口覚に会うの。彼も『無名鬼』の執筆者であり読者だったから。村上さんに一番かわいがられて。樋口は齋藤史と赤ん坊の頃から知り合いなんですよ。齋藤史は「るーちゃん、るーちゃん」って、樋口覚でしょ。自分の名前を言えなくて、「るー」って言う。だから、「るーちゃん」ってな

った。
吉川 樋口さんは齋藤史さんに近かったんだ。
田村 長野だから。樋口さんの父親は東大出の立派な国文学者なんです。名前は寛。本も出してるけども。だから、その樋口ね、あいつのことは「ガク」って言ってた。名前の「寛」も「学問」の「学」に、字も似てますでしょ。お父さんは『土佐日記』とかそういうのを出している国文学者で、若くしてその父親も死んじゃうんだよ。そうしたら、樋口は苦学生で食えないじゃん。すると、そういう

昔の学者の周りの人たちは支えてくれるんですよ、樋口を。アルバイトをみつつけてきてくれたりして、みんなで彼を食わせてあげるために、その辺はすごいですよ。

で、一橋大学にいて、出口ゼミなわけよ、フランス文学者の出口裕弘さんね。わたしは桶谷さんに、アーサー・シモンズの『象徴主義の文学運動』の翻訳を頼んだんですけども。桶谷さんが「ちょっと具合が悪いから僕じゃない人にやってもらいたいな」って言って、それが樋口だった。桶谷さんは自分が引いて、まあ時間がかかる仕事だからというのもあるけど、樋口に譲って、それで樋口はだんだん名が上がってくるわけよ。

吉川 樋口さんは医学関係の出版社の編集者でしたよね。医学書院？

田村 そう。それは給料がいいからだよ。岩波よりもいいぐらいだから、一番いいぐらい。

吉川 村上一郎さんも自殺されて亡くなったんですよ。

田村 そうそう。そのときに樋口と岡田哲也っていうやつがいて、その哲也っていうのは詩人なんだけど、鹿児島ラサールの数学の神様って言われてたんだけど、文学部に入って、それが村上さんの弟子なわけ。樋口の無二の親友で、鹿児島の出水の出だけ。
吉川 いろいろな方と会っていますね。

田村 つまり昔の編集者というのはね、今のようになにか電話とかでやったりするんじゃないよ、家に行って、僕のように三、四時間ベったりしゃべって、そういうところにいるの付き合いで企画が出てくるわけよ。ほかの企画も、その先生との企画だけじゃなくて、違う人を紹介してくれたりする、そういう編集者が、そこでちゃんとした仕事ができるやつじゃないと、人の関係がちゃんとなつくと、駄目だよ。

吉川 そうですね。今はそういう関係は少なくなっているかもしれない。

田村 そうそう、この当時は人格が問われるわけだよ。あいつは嫌いだって言われたらもうおしまいだからね。

吉川 これだけたくさんの方と会われているというのはやっぱり田村さんの人柄でしょう。

田村 出版にしても、製本屋さんとかも選んで、優秀な職人さんのいる製本屋さんとか付き合っ、本作りにこだわる。大きい会社なら機械でだーっとやるだろうけど、こだわっていいものを作る。手製本で職人さんが作る本だから。なかなか味があるわけだ。

吉川 そうですね。山中智恵子さんの歌集『虚空日月』もこの頃出しているんですね。

田村 そうそう、わたしののがけた山中さんの本としてはそれが最初ですね。七四年ぐら

いじゃないの。

吉川 七四年ですね。これが、初めて歌集を出版した経験になるのですか。

田村 そうです。それが歌集としての最初ですね。歌人では山中智恵子さんが一番深いかもしれないね。「田村さんは女流歌人では一番上は誰ですか」と問われるわけよ。あんたは誰を評価してるんだ、はっきり言えっていうんだよ、って。なかなか本当のことは言えない。遠回しにね、築地正子とか言うんだよ。みんなが分かんないあたりを言う。山中智恵子なんて言わないわけよ。ましてや馬場あき子なんて絶対言わない。つぎは柏原千恵子って言うんだよ。

吉川 柏原千恵子は「未来」の人ですか。

田村 「未来」。知らないだろ。わざとそういう分かんない歌人を言うんだよ。おまえ、柏原千恵子知らないのかって。齋藤史とか言うよね、まあ当然のことでしょうよ。最後、しようがないから、山中智恵子かって言う。

吉川 なるほど。この『虚空日月』ってやっぱり今読んでもすごいけれど、とても難解な歌集だと思えます。編集しながらどういう感じだったんですか。

田村 山中さんと百々さんは村上一郎に徹底的に仕込まれて、万葉集か何かを筆で全部手書きさせられるんだよ。すごいよ、その特訓

は。全部だよ、全部。

吉川 へえ、すごい。

田村 それをやられたらしいね。佐竹さんもそうじゃないのかな。佐竹さんだって源氏をやってるからね。藤井貞和に憧れて。

吉川 藤井さんとも関係があったんですか。

田村 関係ありましたよ。藤井さんの今度の詩集だって、佐竹彌生をモチーフにして一編書いてますよ。

吉川 ああ、そうなんですか。

田村 藤井さんは日本芸術院賞をもらったでしょ。北川さんが恩賜賞をもらうのだって、ええっていう感じだよ。うちの女房なんか北川さんに「北川さん、お祝いに三河の味噌と豊橋のかまぼことどっちがいい」って言ったら、「そりゃ、豊橋のかまぼこの方がいい」って言ってきた。北川さん、僕らの仲人なんだよ。

吉川 ああ、そうなんですか。

田村 仲人がいっぱいいるんだけど。山中さんだって僕の結婚式の仲人役やってるんだよ。菅谷規矩雄とか。『太平洋』のあの人、詩人の堀川正美だって。あ、堀川正美知らないのか。**吉川** すみません、そのあたりは。村上さんって伝説の人物という感じで、僕も『歌のころ』は読みました。

田村 教育者ですよ、完璧な。社会思想社の

『人生とはなにか』なんてすごい本だよ。**吉川** 首を切られたんですよね。

田村 右頸動脈ね。日本刀でね。

吉川 すごく過激な印象を持っていたのですが、教育的な信望があったわけですね。

田村 俺たちが新宿の「花嵐館」という酒場において、清水昶と一緒に酒飲んでいたら、ブヤさんが、何か村上が死んだらしいぞとか言ってる。何言ってるんだよ、冗談も休み休み言え、表へ出るとか言ってる。裏取ったら本当だった。死んでるかどうか分かんないけど、やったことは事実だって。じゃ、すぐ行くぞって、ぱーっと車飛ばして家まで行ったんです。桶谷さんが、ああ、田村さんよく来たな、もう疲れたから代わってくれて、あちこちに電話するのをね。

吉川 海軍の人なんですよね。

田村 海軍主計、そうそう。金子兜太と同期の桜ですよ。

吉川 三島由紀夫が村上さんと最後に対談してるんですよ（注・「日本読書新聞」一九七〇年一月）。それで、美しい生き方を証明するために腹を切れるか、っていう話になるんですよ。その後、本当に三島が割腹自殺したので、苦しんだらうと思います。

■「現代歌人文庫」創刊

吉川 その後のことですが、「現代歌人文庫」を創刊されて、これがすごく大事な仕事ですよ。このあたりの話をお聞きしたいんですけども、当時、福島泰樹さんと一緒に仕事をしていたんですか。

田村 そうそう、当時は仲よかったですね。

吉川 彼が、やろうと言いだしたんですか。

田村 そう、彼が僕の家を朝駆けしてきたんですよ。朝、やって来て、キーキー箱持ってやらせてくれ、じゃ、やろうかって言って。

リストアップしてやったわけ。人選はね、福島泰樹の色が濃く出てる。二十巻で止めちゃってそれから先がないわけだよ。それじゃ駄目だと思ったんで、僕が新たに作るって言うたら、それがあいつは面白くなって。僕が福島を無視して次の文庫、砂子屋版を作り始めたって、それが面白くないらしいんだよ。

吉川 なるほど。

田村 だから、彼は国文社でその後、続いたいなのも何冊かやるけどね。

吉川 僕の世代だとやっぱり現代歌人文庫を一番読んでましたね。

田村 いいですよ。

吉川 全巻買って読まない駄目。そんな感じだったんじゃないかな。

田村 だって、春日井建さんだってこれじゃなくちゃ読めないものがあるでしょ。

吉川 京大短歌の勉強会ではだいたいこれをテキストにしています。当時はほかに買いやすいものがあまりなかったですからね。

田村 そうですね。三一書房の選集があったりはしたけどね。

吉川 あれはちょっと買えなかったんで、こっちを買ってましたね。巻頭が肖像写真で、歌集を一冊全部入れて、その後には抄出があり、最後に文章を載せるっていう、こういう構成はどこから出てきたのですか。

田村 それは福島さんと一緒に打ち合わせの中でこういうやつをやろうって、プライベートルームとかそういうのをやろうというふうにして形は相談しましたよ。

吉川 歌人の顔を知ることができて、歌人論が数篇ついているのがすごく勉強になりました。最後の解説も長文で力が入っていますものね。

田村 それは、わたしが批評家とのつながりが深くあったから。また歌人の写真、これは花ちゃんなわけよ。

吉川 武田花さん、武田泰淳さんの娘さんですよ。泰淳さんが亡くなってすぐだったんですよ。

田村 そうそう。というのは、泰淳さんの奥

さんの百合子さんは山中智恵子が大好きなんです。山中智恵子の大ファン。山中さんが入院したりするときも必ず「何か贈り物を届けな」となあって僕のところに送ってくれたりして。

吉川 これ全部撮り下ろしですものね。

田村 そうそう。

吉川 これがすごく印象的でした。岡井さんの写真とか。

田村 逃亡者みたいな。

吉川 逃亡者か、泥棒のような、何か怪しい写真が印象的だった。

田村 そういうふうに写そうと思ってわざとやってるんだよ、こちらはね。

吉川 ああ、なるほどね。そういうことだったんですね。この文庫を作ったときの思い出がありますか。

田村 ありますよ。なかなか面白かった。花ちゃんは作家の好き嫌いがあったりとか。福島泰樹は吉本隆明に原稿をもらいたいけど面識がないから、俺に「頼む、吉本さんの原稿だけもらおうように交渉してくれ」って、そういうのとか。銀座のライオンだって、なかなか写真も撮らせてくれないんだけど、その春日井さんの写真のところは銀座のライオンの。

吉川 春日井さんは、この時もう歌をやめら

れてたんですよ。

田村 その後『青葙』で戻ってくるでしょう、僕は結構『青葙』を批判したから、そしたら岡井さんがそうだろうって、駄目だよねとか言っちゃって。そういうのは、僕はきちっと言うんだ。表では言わないけど。好き嫌いは



国文社の現代歌人文庫『春日井建歌集』と砂子屋書房の現代短歌文庫『三枝浩樹歌集』

きちっとしてるから。

吉川 現代歌人文庫の人選も当時はいろいろとあったのですか。

田村 それは泰樹さんの路線だろうね。その辺はよかったと思うよ、彼自身の選びも。目もいいと思ったし。

吉川 この文庫があったから残ったという歌人も、あるような気がしますね。村木道彦さんとか、これに入ってるから読める。

田村 この後はもう全然村木さんはいないからね。

吉川 当時は前衛短歌の退潮期で、批判も厳しくなっていました。そういう危機感の中で、文庫に残そうという意図があったんですよ。

田村 そうですね。

吉川 岡井さんの『歳月の贈物』も国文社なんです。『鶯卵亭』の次の歌集。短歌史的にも重要な歌集を出版されている。

■砂子屋書房の設立

田村 この頃にだんだん批評っていうのは力を失ってくるんですよ、文芸批評っていうのは。それで『磁場』が終わりになって、

吉川 『磁場』って結構売れたんですね。

田村 売れましたよ。四千部、五千部という感じだったからね。

吉川 結構な部数ですね。

田村 雑誌としては結構な数ですね。現代歌人文庫もよく売れましたよ。ここに昔の部数も書いてある。昔はちゃんと部数まで記録したんだね。(記録を示しながら)『加舎白雄全集』なんて千三百刷ってる。『磁場』一号五千、『磁場』二号五千。

吉川 『虚空日月』も一千二百って書いてある。多いですね。

田村 なかなかだよ。『磁場』四号が五千。『意味と無意味』四刷二千、四版で二千だよ。七版で千六百。吉本の『詩的乾坤』五千百、結構刷ってるでしょ。『磁場』五号で六千。清水昶著『石原吉郎』二千五百。佐竹さんの『天の螢』六百十四。『春日井建歌集』が三千八百。

吉川 三千八百部。相当な数ですね。『月語抄』って伊藤一彦さん？ それで、結構売れてたけれど、文芸批評の力が弱くなりはじめ

て……

田村 だんだん売れなくなってくる。それで、国文社をやめようと思うわけだよ。で、栗屋

和雄と一緒に砂子屋書房をはじめたわけ。

吉川 栗屋さんは国文社の同僚という感じだったんですか。

田村 そうです。国文社に来る前に彼は徳間書店だったんです。だんだん小さな会社に移って行く。彼は、田村隆一の『都市』にいたりしたからね。立教ボーイ、立教の経済なん



だよ。

吉川 歳は一緒ぐらいですか。

田村 僕より二つ若い。

吉川 粟屋さんは二〇一六年に亡くなられたんですね。交通事故だったそう。

田村 ここで「じゃあな」って言って別れて、何でだかよく分かんないんだよ、どういいう経緯で轢かれたんだか、全然分かんない。何台にも轢かれた。かわいそうなことしたよね。いいやつがどんどん死んでいって。最近、芹沢俊介も死んだし、齋藤慎爾も死んだし。

吉川 国文社をやめようと思ったのはどういうきっかけだったんですか。

田村 給料が安いんだよ。どうしようもないんだよ。それが一番だね。

吉川 『磁場』が終刊というのも一番大きな理由ですかね。

田村 もうだから、国文社をやめようと思っ
て『磁場』も閉じるんだけどね。

吉川 それで、いよいよ砂子屋書房設立という。この場所ですとやってこられたわけですね。

田村 ずっとここです。ただ、もっと汚い仕舞屋の木造の二階屋だったからね、ぎいぎい、ぎいぎいいうんで、建て替えなんです。もともとはここは粟屋の親父さんの家なんだから、家賃なんかたまただだよ。で、改築してビルを建てるから少しの間、一、二年出ていかなくちやいけない。でもその間、敷金とか礼金とかそういうのは全然出せないわけ。そして、ここらへん、下駄を履いて和服を着たおばちゃんかカラコンロン、カラコンロンと来て、「田村」とか言って。中山あい子さんという小説家なんだよ。「何か困ってるらしいな」って、「困ってるんですよ」って言ったらね、じゃ、私のところの貸しているあれが家賃も払わないでどっかに消えていなくなっちゃって、空き家になってるから貸してやる、月五千円でいいや、とか言う。それで、礼金、敷金なしでそこに一年ぐらいいいたの。設立して二年目ぐらいの時。

設立した時もここ（インタビューを行った

応接室）ぐらいのところだね、ぎゅうぎゅうの机と椅子なんですよ。それなのに僕は両袖なんですよ。動かないんだよ、社長ですから一応。それで、文房具とか全然新しいのはよこさないで、みんな古いちびたやつ。もう少しちゃんとしたの新しく買えよ、会社代えたんだから、いや、こういうところからやらなきゃ駄目だって相棒の粟屋和雄が言って、すごいよ。俺教わったよ。粟屋和雄は立派だよ。

吉川 これは有名なエピソードなんだけど、太宰治の『晩年』の会社から屋号を買い取ったとか。

田村 いや、買い取るんじゃないんだよ。駄目だって言われたんですよ。それで兵庫の赤穂まで行ったんですよ。中原中也のところに行って、中也の写真を撮ってきて、帰りに赤穂の山崎剛平さんの家があるから、そこに行つて。

吉川 山崎剛平というのは。

田村 山崎剛平さんという人が元の砂子屋の大将なわけよ。それが赤穂の造り酒屋の人の。昭和十年に始まって、終戦前に閉じちゃうわけですよ。もう四十年ぐらいいやっつてないわけだよ。もう関係ないだろ、と思うんだけど、一応律儀に俺は挨拶に行ってるのに、駄目だって言うんだ。おまえは字も下手だしね、



文章もなっていないと、そういうやつにこんな由緒ある屋号を渡せるわけないだろう、出直して来い、というわけ。

で、東京に戻ったら、みんながどうだった、どうだったって聞くわけよ。駄目だったって言ったら、そうかって。早稲田の先生たちが（本を）出しちまえ、出しちゃえって言うんだよ。関係ねえって。だから俺は、特許庁へ行って法的に砂子屋を取っちゃったんだよ。それしたらね、山崎さんの舎弟がその木造の仕舞屋のところに来るんだよ。君はね、山崎先生は駄目だって言ったのに本を出してらしいね。だけど、君の家はなかなか名家らしいねって。どこで調べたんだか分かんないけど。で、一応山崎さんの許可を得るにはどうし

たらいいかと考えて。山崎さんが「砂子屋書房記」という原稿を書いているという、それを本にして出したら機嫌がよくなるんじゃないかと思って。出しましょうかって言っ出したんだよ。それしたらね、山崎さんの周りの偉い先生、尾崎一雄とか井伏鱒二とか、そういう人たちがみんな金をどんどこ振り込んでくれるようになって、あつという間に売れたんだよ。向こうは機嫌直してね、穴子をどんどん送ってきた。だから、俺は恵まれてるよな。

吉川 もともと砂子屋書房という名前は…。

田村 それは最初からもう、奥野健男さんのところで「君、あれは正しくは『マナゴヤ』っていうんだけどな」って言って。

吉川 「マナゴヤ」っていうんですか。

田村 うん、「マナゴヤ」っていうんです、本当は。赤穂の「マナゴ」っていう地名なんです。その由緒ある造り酒屋なんですよ。だから、文人たちにいい酒、強い酒を振る舞って、みんな倒れたらしい。それでだんだん認められたの。砂子屋書房で「マナゴヤ」。当時も「マナゴヤ」とは誰も読んでくれない、だからしょうがない、「スナゴヤ」にしちゃったんじゃない。

吉川 当時からもう「スナゴヤ」だったんですね。

田村 そうそう。あのマークも、竹の根のマ

ークで。

吉川 あれも前から。

田村 前からです。江島印房という由緒ある銀座の印房屋で、内閣総理大臣の判こも作っているようなすごい有名な判こ屋、そこで竹の根っこのマークで作らせた。なかなかいいものです。そこに看板が「砂子屋書房」ってあるでしょ。岩波のあの字は漱石だろ、「岩波書店」というの。「砂子屋書房」という看板の字、あれは山中智恵子なの。山中智恵子の書なんですよ。



砂子屋書房の看板。山中智恵子書

吉川 それで、八三年ぐらいに小池光さんと初めて会うと年譜に書いてありますけど。

田村 そうそう。僕が女房と別れる寸前でね、それで小池が何の拍子かね、一升瓶持って現れたんです、正月に。樋口がいた。樋口と、七月堂店主の木村栄治がいたのかな。写真が残ってますよ。



一九八三年、小池光氏(奥)、田村さん宅にて。手前は七月堂の木村栄治氏

吉川 どういう関係なんですか。
 田村 あの頃彼ら、松平修文たちと一緒に『アルカディア』をやったんじゃないかな。それで、俺何か原稿を、書評を頼まれたんだ

けど、ただでは書きませんって言って断った。それで何だか噂を聞きつけて小池が来たんじゃない。面白かったですよ、小池先生。その時に樋口も初めて小池と会うじゃない、面白いやつだというんでみんな仲間になったんじゃないの。
 吉川 永田和宏さんとはこのあたりで会ってるんですか。

田村 永田さんとは京都で会ったんだろうね。いいやつだと思いましたよ。別れて、ああ、世の中にこんないいやつがいるのかと。まず小池とはまた違うんだ、味がね。

吉川 で、再婚とありますけど。

田村 再婚、そうそう、これもいい人と巡り逢ったんですよ。また出ていったけど。だけど、今も毎週おかずを届けてくれるんですよ。いろいろ作ったものを駅に届けてもらってる。

吉川 ああ、そうですか。詩人の方ですか。

田村 詩人。今、俳句やってるけど。北川さんと親しいよ。愛知の碧南、北川さんと同じところの出身だからね。夜間で大学までずっとなんですよ、仕事は郵便局の局長にまでなってる。

■民俗学への関心

吉川 びっくりしたのは、赤坂憲雄さんの名

著『異人論序説』も出されていて。これは田村さんが手紙を書かれたそうですね。

田村 もちろん。出していただけるなら嬉しいという返事。これから毎月五十枚を送りますから、と。売れましたよ。

吉川 田村さんは民俗学のイメージが強いんですけど、このあたりから関心が深まったんですか。

田村 とりわけこのあたりからですよ。もともと祖父が沖繩学をやったんですけど、これも、吉本さんの家に最初に行った時に、本棚をちょっと見たら僕の祖父の本があるんですよ。この本です。田村浩『琉球共産村落の研究』があったのです。

吉川 一九二七年の本ですか。これはまたすごい。おじいさんは研究者だったのですか。

田村 学者だよ、経済学博士です。『デモクラシーの本領』という本の翻訳もやってるけど。下級官吏だけだね。

吉川 そのおじいさんの本が吉本さんのところにあった、と。

田村 あったの。驚いて、何でこの本あるんですかと言ったら、いや、これはいい本だよって言うの。吉本さんが講演に沖繩に行ったら、沖繩の人たちに、田村さんは大したことないんだけど、この人のおじいさんはすごいぞ、とか言って。この人アイヌもやるから、

それがすごいって言って。吉本の「南島論」の集成で、田村浩の学説が論評されていますよ。かなり高い評価です。

吉川 田村さんもアイヌに関する詩は結構多いですね。

田村 そうそう。この方たちとのつき合いの影響もありますね。

吉川 この頃石垣島に旅行されたと書いてあって、これが初めての沖縄体験ですか。

田村 この辺が初めてかもしれないですね。この頃から折研をつくるんですよ。折口信夫研究会。この勉強会、なかなかいいメンバーだった。

吉川 佐々木幹郎さんも入ってたんですね。あの方もやっぱり民俗学系の仕事が多いですものね、特に東北の。

田村 兵藤裕己という人もね。盲僧琵琶の研究者。

吉川 永田和宏さんが『饗庭』で牧水賞を取ったとき、田村さんも一緒に、高千穂（宮崎県）へ貸し切りバスで旅行したんですよ。あのあたりに鶴っていう地名があって、田村さんが、鶴っていうのは川が鶴の首みたいにくがってるから付いた地名なんだとおっしゃって、へえって思いました。二〇〇〇年だったかな、すごくよく覚えてます。

それで、沖縄には相当行かれてますね。

田村 相当行ってますね。一切観光を許さない。たまには泳ぎたいからそつと海水パンツを入れておく。「まさか泳ごうなんて思っていないだろうねえ」と。一向に許さないので。みんな行くところすべて御嶽。御嶽しか連れて行かないんだ。久高に行ったり、祭を見た。

吉川 イザイホーとか行っただんですか。（注・イザイホーは沖縄県南城市にある久高島で十二年に一度行われる、神職者の就任儀礼。久高島で生まれ育った三十歳以上の既婚女性が神女になる）

田村 イザイホーはもうやってなくて、アカマタ・クロマタっていうのを見る。俺が行ってきたって言ったら、谷川健一さんがええっ、アカマタ・クロマタ見たのか、ぜひ一回連れて行ってください。

吉川 谷川さんはすごく興味があるでしょうね。

田村 第一、アカマタ・クロマタって言っちゃ駄目なんだからね。そのくらい秘儀だから、もう俺たち、どこに行くかというのを島の人に教えない。テーブルリーダーとかそんなの持ったらもうたたき出されるんだよ。ペンとかそういうのも一切駄目、カメラももちろん駄目。廃校になってところの校庭の、この敷地以外出ちゃ駄目だと。この掟を破っ

たら海の中へ放り投げられる。それで、赤坂も頭がよくて、「全部記憶するんだよ」って言って。帰ってきてからものすごい丁寧に全部やるの。それで学者も本で出せるかというと駄目なんです。島の人に「出していいか」と尋ねてみるでしょう、この自分の本の中の何ページ分、それがアカマタ・クロマタをやるけどもって言ったら、駄目。そうすると学者もそれを守って、やっぱり出さないんですよ。だから、いまだに出せない。

吉川 そういふのがあるんですね。沖縄本島ですか？

田村 石垣島の近くの新城っていう無人島。それから、愛知の祭りもあるし、御柱もあるし、みんな折研の連中と竈払いなどにも行くんですよ、十人ぐらいで。

吉川 竈払いっていう儀式があるんですね。

田村 儀式があるの。福岡県と熊本県の間「山鹿」って書く山鹿っていう町があるじゃないの。

吉川 歌仙もよく巻いていましたね。山中さんたちと一緒に。

田村 そうそう、山中さんとね。僕の家でもね、谷川健一さんと山中さんと馬場さんとね、小中さんの捌きでやっただんです。

吉川 小中英之さんね。



一九八五年、田村さん宅で歌仙巻。「春暁の巻」。
山中智恵子・馬場あき子・谷川健一・小中英之各
氏が参加

■砂子屋書房の歌集作り

吉川 八〇年代になって、砂子屋書房の歌集
ってどこかブランド化した感じがあって。若

い世代の第一歌集は砂子屋か雁書館が多かつたですよ。僕もそのとき田村さんに出していただきました。

当時の歌集としては、坂井修一さんの『ラビュリントスの日々』もそうだし、米川千嘉子さんの『夏空の権』、辰巳泰子さんの『紅い花』とか、大辻隆弘さんの『水廊』もそうですね。この時代は集中してますよね。

田村 この頃は出せたんだね。歌集専門の出版社がほかにあまりなかった。

吉川 雁書館はどう思われていましたか。

田村 あっちの方が強かったよね。

吉川 砂子屋書房の歌集はデザイン的にすごく瀟洒で綺麗。倉本修さんの装幀の良さに、やっぱり惚れましたね。

田村 やっぱり製本はちょっと違ったね。見返しとか扉とか、紙の目とか、目の縦目と横目の違いで開きにくくなるということをみんなが知らなかった。みんな製本屋さんに任せちゃった。自分たちで目を考えて紙を注文しないでね、製本屋さん任せにしたんじゃないかしら。そうすれば都合がいいんですからちゃんと目を考えてやったら紙のとり都合が悪くなるんですよ。非経済的になるわけだ。逆目でも大して違わないだろうというふうに甘く考えちゃうんじゃないかしら。

僕は紙も相当選んだ。どちらの紙が感触

がいいか、と。作家で全部変えてた。作家ごとに、この作家はこの紙がいい、松平盟子さんの『シユガー』はバリオンとした方がよくて、安永路子さんの『藍月』はたおやかな、コシのさらっとしたやわなものがいい、とかね。

吉川 当時、活版でしたものね。

田村 そうそう、活版だったからね。本作りはこだわった。多分一番こだわってたんじゃないかしら。

吉川 国文社ともちょっと違いますね。砂子屋になってイメージが変わりますね。

田村 そうかな。でも、製本屋さんは同じなんですよね、並木製本という。今はなくなっちゃったけどね。でも、今の渋谷文泉閣というのも、並木さんと一番近いと思って、選んだんですけどね。製本屋さんの影響はわりと大きいからね。

吉川 坂井さんの『ラビュリントスの日々』は素敵でしたね。砂子屋から出た若手歌人の中で一番早かった気がしますね。馬場あき子さんの紹介だったのかも知れませんが。大辻さんの『水廊』も美しい歌集でした。

田村 あなたの『青蟬』が入ってないじゃないの。

吉川 自分のは遠慮したんです(笑)。そうそう、小池光さんの『草の庭』には思い出があって、僕が歌集の打ち合わせか何かで砂子屋

書房に来たとき、ちょうど『草の庭』ができていて、「これください」とか言って持って帰った覚えがあります。

田村 金払ったの(笑)。

吉川 払いましたよ。そのときはよく覚えてますね。

その後「現代短歌文庫」を創刊された。これ三枝浩樹さんが最初だったんですね。第一回は浩樹さんにしようと思ってたんですか。

田村 そう思っていましたね。彼の歌はスマートだからね。

吉川 このシリーズも本当に助かりましたね。高野公彦さんの『汽水の光』はこれで初めて全篇を読みました。

で、九六年に河野愛子賞を創設する。

田村 河野愛子賞は、「未来」はお金が少なくなって、なくなるかもしれないというふうになつたのよ。誰か継いでくれる人があつたらいいなという話があつて、ちょっと篠弘さんに言ってみたら、岡井さんから電話で、田村さん、継いでくれるんだってね、と。早いよ。それで練馬まで、近藤芳美先生の家まで行きましたよ。

吉川 寺山修司短歌賞も一緒に始めたんですね。

田村 これもね、寺山修司賞にするかってね、もう一つ別な名前があつたの。

吉川 実朝賞だっけ。

田村 そうそう、これ、言ったのは岡井さん。岡井さんが、「田村君、それは右大臣実朝賞がいいね」って。そしたら、篠さんが「右大臣？それは駄目だね」って。



二〇一〇年五月、如水会館にて葛原妙子賞、寺山修司賞授賞式。右から田村さん、樋口覚氏、永田和宏氏。

吉川 たしか授賞式に九條今日子さんも来てましたね、最初の頃。

田村 そうそう、寺山今日子さんね。

吉川 寺山修司短歌賞も許可を取りに行ったんですか。

田村 快く、よかったですよ。

吉川 すごくいい賞だったんですけどね。

吉川 やめられるときはやっぱり…。

田村 お金がかかるからね、一回やることにね。

吉川 まあ経済的にも大変でしょうね。でも、本当にいい賞でしたね。

吉川 二〇〇四年に河野裕子さんの歌集の『庭』を出されましたけど、河野さんは砂子屋からはこの一冊だけなんです。そのときの思い出がありますか。

田村 嬉しかったですよ、お会いできていろいろ話してね。

吉川 家まで取りに行つたと年譜に書いてますね。

田村 そうそう。家まで取りに行った。永田先生のあの高千穂に行つたときも結構一緒にね。

吉川 でしたね。

田村 紅ちゃん、田村さんの手握っておきな、田村さんの手握ると賞取れるよ、って河野さんがね。永田紅ちゃんの『日輪』が二〇〇〇

年に出てるから。

吉川 その後、全歌集の出版がだんだん増えていかれて、これも大きな仕事ですよ。『前川佐美雄全集』もありますしね。『山中智恵子全歌集』、『春日井建全歌集』とか、あれも大変な仕事ですよ。

田村 大変ですね。今もやってるんですよ。こんな売れるわけないと思ってるんですけど。俺がみんな身銭を切ってやらなくちゃいけない。

吉川 『篠弘全歌集』もそうでしたっけ。

田村 そうそう。

吉川 全歌集ってやっぱり貴重ですよ。これがあると全然違いますものね。岡井さんは、全歌集は思潮社の方ですけども、それでもやはり岡井さんの本はたくさん出されましたよね。岡井さんとは結構会われたんですか。

田村 でも、僕は一度も岡井さんの家には行ったことない。家の近くまでは行くけど。

吉川 岡井さんからは相当信頼されてたんじゃないですか。

田村 うん、まあね。ご馳走になったこともあるよ。

吉川 岡井さんの原稿は手書きなんですか。

田村 手書きですよ。この『磁場』の『西行に寄せる断章。他』とか。今でも持ってますよ。



一九八四年ごろ、右から岡井隆氏、樋口寛氏、田村さん

二歌集のノート、つまり原稿。それは貴重なんじゃないかしら。

吉川 すごく貴重ですね。

田村 印刷所に入れたときの原稿、原稿というかノート。これは持ってもしょうがないから寄付しようかと思ってる。

吉川 詩歌文学館とか。喜ばれるんじゃないですか。

田村 そうですね。

■詩人として——故郷をうたう

吉川 詩人としてのこともお聞きしたいと思います。第七詩集ですね。『鬼の耳』は田村さんの代表詩集で、このあたりから民俗学的なイメージが入ってますね。故郷に対する思いっていうのもかなりあるようです。

田村 うん、何だかね、家はどうするかという、もう壊すかとかいう話が出たから、代々のものをそんなこととしてはいけないんじゃないかって僕は言って。

吉川 冒頭の「魂送り」という詩の出だしがすごく美しくて。

煙光りする舟戸

利根のみくまりのあたりから

記憶の等高線は刻まれる

ぬるい吾妻川を、子持山を右に仰いで
御伽篋のつとに入って遡ってみようか

……(後略)

「畑光り」や「記憶の等高線は刻まれる」という表現が印象鮮明です。「舟戸」というのは地名ですか。

田村 渋川の八崎舟戸。川船の出入りするところで、赤城から下りてきて、高山彦九郎ともその辺を渡っている。

吉川 この詩は、では故郷の方に帰って行かれるときの。

田村 いや、そうでもない、場所的には利根川と吾妻川が分かれるところで、子供の頃にそこに住んでいた。

吉川 子持山とありますね。後の方の「杖の大人に出偶えるだろうか」というのは。



『デジャビュ』以後 田村雅之詩集

1992~2016

(二〇一八年、砂子屋書房刊。第七詩集『鬼の耳』から第十二詩集『碓氷』までの各抄を収録)

田村 それは、幻の「桃廻屋」っていう屋号がありましてね。「モモノヤ」というんですけど、つまりうちの五代前ぐらいからの屋号なんです、医者のおね。俺のうちは佐々木四郎高綱の末裔だって言われてて、蘭学の高野長英の弟子なんですよ。

吉川 そういうことなんでですね。高野長英に關する詩も多いですね。

田村 長英が江戸に出てきたときにうちの先祖も江戸に出てきて、尚歯会というのをつくって。うちには長英関係の本がいっぱいありますけどね。

吉川 蔵に相当、当時の医学関係の資料があったとか。

田村 これが蔵書目録。木暮家というんだけど、木暮は母の方で、その家はまだ健在で、壊れない。

吉川 家自体も残ってて、何百年とか。

田村 百五十年ぐらい。でも、蕨茸きじゃないよ。瓦だよ。

吉川 そういう古い家は歴史的なものがたくさん残っているんでしょうね。

田村 ありますね。変なものがいっぱい出てくるからね。

■歌集を作るといこと、本を作るといこと

吉川 二〇〇九年に日本現代詩人会副理事長に就任されましたね。

田村 副理事長を三回やっている。

吉川 そちらの仕事も大変なのは。

田村 もっと砂子屋の仕事したいね。そう思っているんだけど。あんまり景気よくなって、どうにかなりませんかね。

吉川 歌集の出版っていま大分変わってきてますけど、最近はどう考えていらっしやいますか。

田村 軽い方がみんないいのかね。

吉川 若い人からは歌集の出版って高いという声があるから。贈呈とかも、何で献本しないといけないのですかとかという人も結構出てきて。

田村 言ってる。

吉川 自分の歌をぜひ読んでほしいから贈るのにな、とは思ってますけど、やっぱりだんだん変わってきたなあという感じはありますね。七〇年代あたりから歌集の出し方が変わりましたね。先生や師匠の許可がないと出版できない、という慣習もあって、第一歌集は中年以降に出ることが多かったのが、七〇年代以降は、二十代の青春歌集が普通に出るようになった。歌集の出版文化はそこで大きく

変わったんじゃないかなという気はするんですけど。

田村 だけど、また変わってきてるんじゃない。

吉川 新人の入れ替わりが激しくて、新人が何年かごとにどんどん変わっていくという印象がありますね。第二歌集以降が難しくして、第一歌集からうまく進展できないケースが少なくない感じがします。

田村 そうだね。むしろ昔は第二ぐらいがインパクトのある歌集になってくるのね、最初より。

吉川 最近短歌ブームらしいですけど、売上げが増えたとか、そういうことはないですか。

田村 本の売り上げはいいのかなんか言いませぬ。書店からの注文というのは少なくなってる。電話とかメールで注文が来ますね。

吉川 でしょうね。みんなネットで買う。

田村 郵便局に行くのも面倒臭くて、振り込みも面倒っていう人も増えてるらしいから。注文から決済まで家においてできるわけで、出かせないで済むでしょ。本はポストに入るわけだから。送料も取らないっていったら喜ばれるよね。

吉川 歌集を出したいと思ってる方には何か一言ありますか。

田村 安くします。

吉川 そういう話じゃなくて(笑)、もうちょっと精神的な話。

田村 そういう話だよな。確かにね、そんなに下げてもとは思う。いい本を作った方がいいと思うんだけど。だから、うちなんか高くつけてたじゃない、定価も三千円って。今すごく楽なわけですよ、これだけ紙(の値段)とかが上がって。安くつけてる会社なんか大変だと思うよ。

吉川 装幀と中身が一緒になって一つの作品という気がしますものね。歌集は特にそう、中身と装幀がずれているとすごく気になる。歌集は、紙の本体が一つの世界をつくっているというのを教えられた気がしますね。

学生のところ、最初に三月書房で歌集を買ったんだけど、高かったなあ。

田村 三月は安くしてたの。

吉川 いや、全然してないですよ、もちろん。当時、僕も若かったから、月二冊ぐらいやっとなんか買えるかって感じだったですね。

田村 僕は本は結構買うよ。欲しいと思うとあんまり金に糸目はつけずにね。この前正木浩一さんの句集も買った。いい句集だよ。正木ゆう子さんのお兄さん、熊本の俺、家まで行って酒飲んだこともあるんだけど。すごくいいですよ。もう亡くなってるけど。

吉川 加舎白雄の全句集を出されていたのはびっくりしましたね。

田村 ああ、そう。加舎白雄はいいですよ。

吉川 中村真一郎さんがエッセイで紹介していたんです。すごく繊細で美しい句ですね。

田村 天明の五俳傑の一人。一番いいよ、天明の中では。僕らはルーペで起こして原稿を作るところからやってたから大変だったよ。

吉川 文庫が今あるから、全句集は買わなかったけど。申し訳ないですが。

田村 ああ、そう。国文社の。

吉川 二巻ぐらいの。

田村 そうそう、上下ですね。いい本ですよ。

吉川 ウェーバー研究もされたんですね。

田村 ウェーバー全集出そうと思ったよ。マックス・ウェーバー全集って一回も出たことないんですよ。

吉川 ああ、そうなんですか。岩波文庫しか知らないけど。今でも人気ありますものね。

田村 でもね、ウェーバーのドイツ語は難しいんだよ。マルクスは簡単だけどね、ウェーバーは難しい。

昔はいろいろ先生のところに行くのもみんな紹介状をもらって行くからね。紹介状をもらって行くからね、きっちり応対して面倒見られるんですよ。だから、僕なんかは宇佐見英治さんに会うっていつて教授から紹介状を

書いてもらって宇佐見さんに会ったら、新宿のナルシスまで連れて行ってくれて、初めて矢内原伊作と会わせてくれて。辻まことさんとも連れてきて会わせてくれてね。すごいね、ああいう面倒は。

吉川 しかし、幅広く出しているんですね、本当に。加倉白雄から、フランス哲学もね。

田村 オシップ・マンデリシュタムも出しているんだよ。マンデリシュタム知らない？ロシアの詩人で、肅清されちゃうんだけど、ボードレールに影響受けてるね。『カーメ』っていう、『石』っていう詩集を僕出したんですけど。

吉川 そういう詩人を、どういうふうに見つけるんですか。

田村 ロシアの翻訳をしている先生たちと話して、田村さん、マンデリシュタムいい詩人だよって言われて、読んでみるといいんですよ。ああ、ロシアにこんなボードレールの影響を受けてる詩人もいるのかと思って、フォルマリズムもみんなこっちから来てるんだなと思ったりしてね。編集者もやっぱり幅広い情報を持ってないと駄目だと僕は思いますね。深くする必要はないって言われる。浅く広く。

吉川 それでもやっぱりすごいなあという感じがしますね。

田村 その人のどういう影響下で過ごしたとか、つながりが大切なんだろうな。あの人が突っつけば、これが出てくるという、あの人のこの話するともう食いつくよ、とかね。

* * *

吉川 ありがとうございます。田村さんの砂子屋書房の出版目録を見ると、本当に一つの現代短歌史だなという気がしました。田村 いや、すぐれた歌人の本をたくさん出せたからね、ありがとうございます。おかげさまですよ。

吉川 今日は本当に、貴重なお話をありがとうございました。うございました。

(二〇二三年四月八日 砂子屋書房にて)



二〇〇九年一月、角川新年会。森岡貞香氏（死の一週間前）を囲んで。右から田村さん、森岡氏、小池光氏、永田和宏氏、後列に永田淳氏

田村雅之さんに聞く 資料（吉川宏志作成）

- 一九四六年 群馬県高崎市生まれ。
 中学校 書道部。高校 剣道部。
- 一九六六年 明治大学商学部。ドイツ文学研究会。
- 一九六七年 アスパック（アジア太平洋協議会・南ベトナム支援）
 反対闘争。ヴェーパー研究。
- 一九七〇年 国文社（二〇二二年廃業）に入社。駆け落ち、結婚。翌年、編集長。
- 一九七四年 「磁場」創刊。一九七三年 岡井隆「西行に寄せる断章。他」（第4号・短歌復帰）
 山中智恵子『虚空日月』
- 一九七五年 村上一郎自死。
- 一九七七年 「現代歌人文庫」創刊。第一回「春日井建歌集」。倉本修と初めて会う。
- 岡井隆歌集『歳月の贈物』（一九七八）・福島泰樹『転調哀傷歌』（一九七六）
- 一九八〇年 「磁場」終刊。中原中也・宮沢賢治特集号
- 一九八一年 粟屋和雄とともに、株式会社砂子屋書房設立。太宰治の『晩年』を出版した会社を引き継ぐ。
- 一九八三年 小池光と初めて会う。
- 一九八四年 再婚。
- 一九八五年 赤坂憲雄『異人論序説』。翌年、折口信夫研究会を立ち上げる。沖繩石垣旅行。（田村浩『沖繩の村落共同体論』）

〈この頃刊行した第一歌集〉

坂井修一『ラビュリントスの日々』（一九八六）・米川千嘉子『夏空の權』（一九八八）・辰巳泰子『紅い花』（一九八九）・大辻隆弘『水廊』（一九八九）・大滝和子『銀河を産んだように』（一九九四）・小池光『草の庭』（一九九五年）

一九八七年 現代短歌文庫創刊（第一回配本 『三枝浩樹歌集』）

一九九六年 河野愛子賞（二〇〇四年まで・以後、葛原妙子賞）・寺山修司短歌賞。二〇一六年まで。

一九九九年 『鬼の耳』（第七詩集・一九八九年）で横浜市人会賞。

二〇〇四年 河野裕子歌集『庭』

〈この頃刊行した全歌集〉

『定本森岡貞香歌集』（二〇〇〇）・『葛原妙子全歌集』（二〇〇二）・『前川佐美雄全集』（二〇〇二～二〇〇八）・『山中智恵子全歌集』（二〇〇七）・『春日井建全歌集』（二〇一〇）

二〇〇九年 日本現代詩人会副理事長就任。

二〇一六年 粟屋和雄氏、死去。